

志村哲郎教授への「送別の辞」

社会福祉学部教授 中村 文哉

本誌の編集委員会より、志村哲郎先生の定年による御退職に際し、先生と同じ社会学専攻である中村が、志村先生をお送りする文章をしたためよとの依頼があった。しかし、本学社会福祉学部のみならず、岩田啓靖前学長や私の前任であった現松山大学の山田富秋先生といった本学関係者の方々、更には「日本解放社会学会」のメンバーなど、学外にも、私より志村先生のことをよくご存知の方は大勢おられることを考えるにつけ、果たして私が適役であるのか、自信がなかった。しかし、志村先生は、私の所属する「社会学Ⅰ研究室」と並び立つ「社会学Ⅱ研究室」の所属であり、この社会福祉学部のなかで社会学の研究・教育を私と志村先生で担ってきたことを鑑み、御受けすることにした。私に課せられた役割には、自ずと限界がある。このことを承知の上で、私の理解している限りでの志村先生について、言葉を綴らせて頂きたい。

まず志村先生の略歴から「送別の辞」をはじめよう。志村先生は、1976年に関西大学社会学部を卒業後、1981年に同大学大学院社会学研究科に進学され、1984年3月に、同大学院博士後期過程を単位取得退学された。そして本学には、まだ名称が山口女子大学であった時代の最後の年にあたる1993年4月に文学部助教授として、赴任された。翌1994年には共学化により山口県立大学への名称変更があり、爾来、新設の社会福祉学部にも所属され、教鞭をとられてこられた。そして、1998年4月からは、社会福祉学部教授に昇任された。

そのようななか、志村先生の所属する研究室属性は、当初は「障害者福祉論研究室」であり、社会福祉実習の担当者であったが、2009年に同研究室を離れ、「福祉文化論研究室」に移られ、社会福祉実習の担当を外られた。そして、その後、2009年からは、「社会学Ⅱ研究室」に移られ、定年退職に至る。この間の志村先生の担当科目は、社会福祉学部の専門科目が「障害者福祉」「福祉文化論」「福祉社会学」「デス・エデュケーション」、一般教養科目は「哲学」「社会学b」と、幅広い領域で、教鞭をとられた。これ以上の紹介は、おそらく、この拙文に続く志村先生のインタビューに詳しいとおもわれるので、次に、志村先生の専門領域に関することについて、記してみたい。

志村先生の社会学的思考の一つの軸をなすものとして、差別問題研究をあげることができる。通常、差別問題研究は、ひとつの対象領域を深めるスタンスが一般的である。だが、志村先生の研究対象は、しょうがい者、部落問題、女性と、複数の対象領域にわたる。こうした差別問題の展開を試みる点に、〈志村社会学〉の本質が横たわっているようにおもわれる。

これは、御自身がしょうがいと向き合いながら生きてこられたことを足場にした展開であるといえるのではないだろうか。自らのしょうがいを生きることから、差別問題への関心が生まれ、それがいったんは部落問題に転位しながら、それをバネにして、再びしょうがい者差別の問題へと降り立ち、しょうがい者を取り巻く現実とその社会関係のあり様に関する問題関心が生まれると同時に、支援・介護をめ

ぐる問題系、換言すれば社会福祉と福祉文化の問題系が開け、そこから更に〈主体的に生きること〉へと差別問題を差し戻す一つの着地点に辿り付く。〈志村社会学〉における方法論構築のこの遍歴。

志村先生と私の共同作業の一つとして、『生と死の人間論』（2009年、ふくろう出版）の刊行がありましたが、志村先生が担当されたそのⅡ部「家族とジェンダーの視点からの〈生・老・病・障・死〉を考える」は、その一つの集大成といえるのではないのでしょうか。この展開を可能ならしめたのは、これら一連の差別問題を、差別問題を抱えた人たちが〈生きること〉という差別問題の前提をなす地点に降り立ち、捉え返す独自の視点、即ち人間であれば誰もが自らの生の内に〈老・病・障・死〉を内在させている地平に降り立つ独自の視点にあった、といえるでしょう。そして、人間である限り、誰もが遭遇する〈老・病・障・死〉を内在させている地平に還元して、そこから、これら一連の差別問題を、別様のものとして、照射（異化）することが、福祉社会の問題としての女性労働のあり様を含みこむ家族とフェミニズムの問題系の通路につながり、更に、しょうがい者、被差別部落出身者、赤ん坊、女性、主婦、家族、フェミニストといった〈志村社会学〉の登場人物（人間）たちを取り巻く、福祉社会、福祉国家のあり様への探求へと、つながっていく。それが、〈志村社会学〉の、壮大ともいえるパラダイムであると考えます。

〈生・老・病・障・死〉という視点もつその射程は、〈健常－しょうがい〉という図式を棄却して、人間の生そのものに〈老・病・障・死〉が内在する、もしくは〈健常〉のなかに〈しょうがい〉が既に内在しているという新たな生命観ないし価値観を開示することで、しょうがいへの差別と偏見を抜ける道筋ができるとしたら、施設化する社会福祉の現状とは違う方向性を導き出せるのではないだろうか。こうした点でも、〈志村社会学〉が私たちに突きつける問いは、重要な意味を持つと考えられます。

更に、もう一点、付け加えるならば、こうした〈志村社会学〉には、一つの「人間解放の社会学」への可能性を秘めているといつてよいでしょう。これまでの志村先生の社会学的思考と営みが、このような形へと昇華していくならば、それは、志村先生が学生時代に影響を受けたマルクス主義哲学から人間の問題を捉え返す理論的展開と通低しあい、呼応しあう体系性を獲得する地平へと至るではないでしょうか。

ここ数年の志村先生は、病いと闘う時間が長くなり、さぞかしきつい体調のなかを生きておられることでしょう。しかし、志村先生は、いつも、病いのどん底からはいあがってこられました。このたび、大学の職から引かれることになりましたが、その生きる力を、今度は、未だみぬ〈志村社会学〉の高みへと赴く時間に、振り替えて頂ければとおもいます。

21年にわたる長い月日、お疲れさまでした。